

# 日本模型新聞・編集長に聞く

梶原 博

## 編集長・村岡氏

日本模型新聞を発行している G-Toppress 社を訪問し、編集長の村岡氏と話しをさせていただいた。この新聞は、業界誌として64年の歴史を誇り、村岡氏はそのうちの40年ほどに関わってきたという。筆者は自分の趣味もあって最近この業界についていろいろとリサーチを始めたところだが、大学関係者という立場から見ると、バランスの取れた資料や研究業績は多くない。とりわけ、模型業界、あるいは、模型という趣味の世界において、一貫した立場から長期的に関わってこられた村岡氏のお話を聴けたことは貴重な体験であった。

## 日本におけるメーカーの位置づけ

村岡氏との話の中で、筆者が最も興味を持ったのが、日本のプラモデル世界におけるメーカーの位置づけ、あるいは影響力についてである。筆者は、この世界についていろいろと調べ始めてみて、モデラーと呼ばれる「作る人たち」と、メーカーとの間の関係について、漠然とした疑問を感じていた。すなわち、模型のような趣味性の強い世界であるにも関わらず、日本においてはこの世界に対するメーカーの影響力がむしろ（他国に比べて）大きいのではないか、という疑問である。

模型世界の中で、スケールモデルというジャンルがある。ミリタリー関連のアイテムを中心とする、縮尺(スケール)を明記した、簡単に言えば、

「本物らしさ」を重視するジャンルであり、模型作りという作業が、「世界の模写」であることを考えれば、模型世界の中心ジャンルであることは、ある種必然である。それにもかかわらず、スケールモデルの世界(業界)は市場的に着実に縮小傾向にあるだけではなく、様々な媒体を通じた、あるいは筆者自身の潜在意識を通じたこの世界は、ある意味で他のジャンルに対して「浮いて」いるのである。



模型あれこれ

## 子供たちによる、戦後のプラモデル・ブーム

このような疑問に対して、村岡氏は、極めて明確な説明を行っている。氏の説明では、ち密なスケールモデルをめざすモデラーは、本来日本では極めて少数派である。昭和30年代にプラモデルが生まれ、小学生などの低年齢層を中心とした模型少年たちは、必ずしも、それに先立つ高度な技術をもつ先輩スケールモデラーとはつながっていない

い（というか、新たな模型少年たちの数が多すぎたといった方がよいであろう）。

この時代のプラモデルの多くは、ゴム、ぜんまいなどの動力をもつものが多数を占めていたが、それは子供たちにとって、ち密な造形的な「本物らしさ」よりも、圧倒的に受けるからであり、メーカーはそうした市場に乗っかっただけに過ぎない。ところが、爆発的な市場の拡大とともに新規参入も増え、したがってメーカー間の競争も激しくなると、他社にないセールスポイントが必要になる。ここで、日本のスケールモデルの発展は、作り手のいわば下からの流れよりも、メーカーサイドの都合で行われてきた、これが、村岡氏の説明である。このような説明は、筆者としては極めて「腑に落ちる」ものであった。

村岡氏自身は、子供のころから、木を削って零戦を作ってきたコアなスケールモデラーである。そのような氏に対して、「昨今のスケールモデルの衰退は、個人的には寂しくないですか」と尋ねたところ、「この業界の歴史は、その時々的情勢に合わせて、その時々戦略を立てながら、企業が生き残りのために必死に努力してきたことの結果に過ぎない。このような新聞づくりにずっと関わってくる中で、自分自身の思いよりも、そうした思いから一歩離れて今では模型世界を見られるようになりました」というような趣旨の返答をされていた。ネットを含めた普通のメディアからはおよそ得ることのできない、立ち位置をはっきりさせた気持ちの良い意見だと思う。お話の中では、そのような氏の「模型作りの楽しさ」についても興味深いお話を伺えたが、それはまた、次の機会に紹介したい。

## ● 村岡氏とプラモデル

業界新聞の編集長として、「クール」なご意見をお持ちの村岡氏であったが、もちろん、モデラーとしての「ホット」なお話を伺うこともできた。

敗戦後、樺太から北海道に引き上げた昭和20年代が、氏のモデラーの出発点だったそうだが、こ

の時代はプラモデルが生まれる前の、木を削るソリッドモデルの時代であった。このとき、まわりで模型作りを教えてくれたのは、兄や親など、零戦などの実機を直接知っている世代。戦争中の雄姿（あるいは悲惨な末路）などの実機に対する様々な想いと共に、指導してくれたそうで、「そうした想いを共有することが模型作りの喜びでもあったんですね」。もっとも戦後10年は、社会的にミリタリーモデルを作ることはいろいろとはばかる時代だったそうで、だからこそ、その中での模型作りに力が入ったことだろう。

そうした「はばかり」が薄れていく中で、昭和30年代にプラモデルが生まれ、爆発的なブームとなる。パート1で触れたように、このブームは小学生を中心とした低年齢層が支えており、動きを重視した玩具性の強いモデルばかりであり、作り手（子供）の中には、それまでの戦争に対するアンビバレントな想いはそれほど強くはなかったであろう。しかし、村岡氏のようなモデラーにとっては、プラモデル・ブームの到来とともに、日米の兵器の再評価の気持ちが、新しい時代を「作る喜び」につながっていったようだ。

## ● 「戦後10年説」

このあたりの戦後直後のモデラーの思いは、筆者にとっては全く新鮮な話であったが、とりわけ、氏の「戦後10年説」は興味深いものであった。「戦後10年説」とは、とりあえず筆者が勝手に命名したものだが、その内容は、「戦争が終わって、兵器に対するいろいろな想いが整理されて模型界で表面化されるには10年くらいかかる、それは、ベトナム戦争の時もそうだった」というものである。

戦後一定のスパンを経て、かつての戦争に対する様々な想いが少年向けのメディア（プラモデルを含む）を通じて表出するというのは、昭和34年生まれで、ウルトラマンをリアルタイムで見たものについてよく実感できる。しかし、ベトナム戦争はどうだったのだろうか。

「日本の場合は、敗戦という戦後の中で、複雑

な想いが形になるまで時間がかかるというのはよくわかるのですが、ベトナム戦争の場合、少なくともベトナムにとっては、勝利した戦いであって、「敵国」アメリカの兵器はともかくとして、プラモデル全体としてはそうしたややこしさは日本ほどではなかったんじゃないですか」という筆者の疑問に対して、「アメリカの兵器（ファントム戦闘機など）のプラモデルを作る中で、アメリカの科学力を実感し、かつての戦争に対する反省や、今後の自国の軍の近代化に向けての思いを表面に出せるようになるためには、やっぱり10年くらいかかったんですよ」とのこと。「その意味では、やっぱり平和は大事ですね」と締めくくった。

ちなみに、そんなベトナムの模型界の情報はどうやって知ったのですか、と伺ったところ、当時ベトナムに旅行した仲間たちを通じて得た感触だったそうで、モデラーが知らない土地に行ったら模型屋に駆け込んで店長と話し込むのは、今も昔も変わらないらしい。

なお、この話を同年輩の友人（かつて大学の航空科を志望していた親子2代のモデラー）に話したところ、いたく面白がった上で、「じゃあ、最近は（例えばオスプレイ）どうなんだろう」と問い返された。「（冷戦後の）価値観の一元化の影響は大きいだろうね」と返事はしたものの、村岡氏の「戦後10年説」について、改めてもう少し掘り下げて考えていたいとも思った次第である。

（本稿は梶原氏が生前、篠藤に渡していた原稿である。小見出しは篠藤がつけた）

### 追悼のことは

別府大学短期大学部准教授  
後藤 善友

梶原先生の数多くのことはが脳裏に焼き付いています。

梶原先生はよく「自分の信条は合理性」と仰ってました。「だから食事の前に歯磨きをする人は嫌いなんだ。だって非合理的でしょ」。こんなレベルでも合理性を要求されていました。

また、日頃から「知識欲が強い方だから」と、様々な方面、ときに予想外の方面についても新しい知識を追求し、「自分の頭で納得出来るまで気が済まない」と仰ってました。「斜め上あたりにいるもう一人の自分」が中途半端を許さないのだそうです。常に何事にも全力な先生の姿を自分と比較し身の縮む思いでした。

とにかく頭の回転が速く知識も豊富なため、梶原先生は調子が良くなると議論が段飛ばしで高速になります。私にとってはこの高速議論について行くのはなかなかの知的訓練でした。

「後藤君と違ってさあ、わたしは親しい女性とは信頼とか人間性とかそういったものでつながっているんだ。だから女性のほうさえOKならみんなでお風呂にだって入れるよ」

梶原先生、これは何段飛ばしでしょうか。

別府大学文学部教授  
松田 美香

梶原先生とはここ十年近く、学科は異なりますが、留学生教育という点では近い部署でした。日本語教育部門がセンター化するときも、あまりにも熱心に付き合ってくださいるので、ある時「梶原先生にも御専門があるのだから」と言うと、ちょっと驚いて「ああ、そうだった」とおっしゃいました。ちょっと忘れん坊なところがありました。学内で出会うと、いつも笑顔で、こちらが話しかければ立ち止まって快く話してくださいました。闘病が始まってから、よく階下の日本語教育研究センター教員室で、非常勤講師の方たちと歓談していらっやいました。日本語の先生たちは全員女性で、どなたとも楽しげに話しているのを見て、「本当に、もう、女性に囲まれるのが好きなんだから！」と憎まれ口を言うと、実に愉快そうなお様子でした。多くの留学生を受け入れ、短い2年間で行先を決めていくのは本当に大変なお仕事だったと思います。御冥福をお祈りいたします。